

日本語教育でのコンピューター利用について①

機械を活用した授業

70～80年代、語学教育といえば、LL (Language Laboratory) を活用することが時代の流れであった。しかし、LLをはじめとする機械には長所と短所が必ずある。筆者自身も大学時代、韓国語の学習にLLの授業があり、発音の矯正で苦労した経験がある。苦労したとすることは、まったく音声だけで耳から入った音を口で再生しているつもりなのに、発音を訂正されたことである。何度繰り返してみてもテープの音声と自分の発音とどこがどのように違うのか理解しづらかった。また後年、自分が日本語教育に携わりLLを使った授業を行うようになったが、学習者から、LLは機械的に答えるだけで嫌だとか面倒だという声をよく聞いた。当時は、文の構造に着目し、文法項目をLLで繰り返し練習し積み上げていけば、話せるようになっていくと信じていた。



写真1 80年代のLL教室のブース

現在、学習者の理解の助けにもなるように授業方法にいろいろな工夫がなされ、パソコンやタブレットを大型テレビやプロジェクターにつなぎ、活用している

人も多いと思われる。視聴覚機器が役に立つのは、LLのような音声だけの場合とは違って、視覚と聴覚という二つの感覚器官にうったえることができるからである。感覚器官にうったえるものが増えるほど、学習者の理解が容易になることは疑いのないことである。視聴覚教材を積極的に授業に取り入れていくことは、学習者の理解を助ける上で非常に有効であるといえる。語学教育の中では、一般的に見てもLLを積極的に導入してきた面があるように思うが、その利用については教師の柔軟な発想による工夫があってこそ、最大限に効果を発揮させることができるのではないだろうか。

機械の活用について

英語教育者である羽鳥博愛は、『国際化の中の英語教育』(三省堂、1996年)の中で、「今後、LLのような機械を活用しての語学学習を無視することはできない」と説明している。その理由は、語学の習得は本質的には個人の努力に負うところが大きく、従来の語学教育の方法では個人差に応じきれないことがだんだん認識されてきたからであると説明している。ただしその際、従来のLLの使い方にとらわれずに、現場の教師が機械の特性を活かして使い方を開発していくことが大切である。視聴覚機器には長所と短所が必ずあり、教師はそれを踏まえた上で最大限に活用していく努力をしていくべきである。

羽鳥は、LLの指導法について次のようにも説明している。「LLの使用の一番基本となるのはLL教室内の機器の操作であるが、最初はLLを使い慣れている人に自分がやりたいことをするにはどこをどうすればよいか、最低限のことを教えてもらうことである。次はメーカーが作っている操作の手引きを丹念に読ん

で慣れさえすればよい。しかし機器の使い方にしても自主開発は必要で、それぞれの機器の性能を一通りのみ込んだら、業者が元来考えた以外の使い方を考えてみることも大切である」(羽鳥1996:122)。

語学教育に機械を介在させていく上で、このことは非常に大切なことだと考えられる。なぜなら教師が機械を利用して思うような効果が得られなかった場合、とかく機械のせいばかりにして、教え方のどこがどのように悪かったのか振り返ることを疎かにしてしまいがちになるからである。

パソコンの時代

LLなどの機械を語学教育に取り入れることについて述べてきたが、90年代以降はパソコンの時代に入って行った。筆者とパソコンの出会い



写真2 天理教語学院のコンピューター教室

は1995年の韓国留学中のことであった。当時、私以外にも派遣留学生がいたが、皆、Macintoshのノートパソコンを使っていた。その頃はまだパソコンとワープロの違いもわからなかった筆者は、何が便利なのかと聞いたが、ハンゲルが打てるし、いろいろな機能が追加できるとのことだった。すでに韓国ではインターネットも始まっており、日本より進んでいた。ソウルにはネットカフェもでき、そこに行けばインターネットにも接続できた。帰国後、自分もすぐに始めなければならないとお金を握りしめ、家電店に行った。もともと、機械好きでアマチュア無線などの電子機器もいじっていたので、パソコンにどっぷりはまるのに時間はかからなかった。パソコン関連書籍や雑誌を何冊も読み、ホームページを作ったり、名簿や成績表などのデータベースで作ったり、自作パソコンを作ったり、仕事でもプライベートでもなくてはならないものになった。そのうち語学教育に活用していくべきだと思うのも自然な流れだった。ちょうど日本語教育学会や研究会などでもパソコン利用に関するものが出始めていた頃である。あれこれ調べてはパソコン活用について考えていたが、実際に教室でやってみないことには、どんな効果やどんな問題が起こるのかわからなかった。

コンピュータールーム

日本でのパソコン普及が進むにつれ、学校の中にコンピュータールームを作ろうという気運も高まりつつあった。当時、日本語教育センター主任であった渡辺治則天理教語学院前校長と何度もパソコン導入について話し合い、当時の永尾信雄校長にも相談をした。渡辺前校長は語学教育のコンピューター関連の研修会に参加し、コンピュータールームの導入を薦めていた。筆者も同じ考えであった。いろいろ検討を進めていたが、なかなか予算的にも大きいことなので、実現には程遠いことなのかとも感じていた。忘れもしない2000年の1月のことである。留学生たちと天理教の正月の行事である「^{せちえ}節会」で、給仕のひのきしんを行っていた時に永尾校長から電話が入り、コンピューター購入の見積もりを出すように言われた。飛び上がりたい気持ちだったのは言うまでもない。